榎本武揚について～日本史A課題～

〈選んだ理由〉

戊辰戦争で最後まで降参しなかったのが榎本武揚で、そこに至った流れや、その後の人生について知りたいと思ったから。

生い立ち

榎本武揚は、江戸に生まれた。幼名は、釜次郎。
父は幕臣で、「大日本沿海輿地全図」作成に参加したり、11代将軍家斉の御付となって将軍家の御用を勤めるなど、功績を残した。
釜次郎は昌平坂学問所に入学し、修了後、箱館奉行に仕え、樺太を探険した。その後、長崎海軍伝習所に入学した。オランダ人教師から機関学や化学などを学んだ釜次郎は、次第に頭角を現し、1858年には江戸に開設された築地軍艦操練所の教授となり、武揚と改名した。

オランダ留学

1862年6月にオランダへ行き、ここで榎本らは、船舶運用術、砲術、蒸気機関学、化学、国際法などを学んだ。そして、1866年7月、戦艦「開陽」が完成し、1867年3月に横浜港に帰港した。

江戸脱走

オランダに留学していた5年の間に、徳川幕府を取り巻く環境は激変し、榎本が帰国したとき、幕府はいつ倒れるかわからない状態だった。そして、榎本らが帰国して半年余りで、将軍徳川慶喜から大政奉還が奏上され、薩長や岩倉具視などが、「王政復古の大号令」を出した。

1868年1月2日、鳥羽・伏見の戦いが始まった。榎本も、開陽

を旗艦とする艦隊を率い、大坂湾内で薩長側の軍艦と交戦した。しかし、1月6日夜、大坂城にいた将軍慶喜が、味方の軍を見捨てて、江戸へ逃げ帰ったことにより旧幕府軍は戦意を失い、撤退した。1月7日に大坂城に入城した榎本は、城に残された武器や備品および金 18 万両を運び出し、負傷兵らとともに富士山丸で江戸に引き揚げた。江戸に戻った榎本は、海軍副総裁に任ぜられた。榎本は、新政府軍との徹底抗戦を主張したが、江戸城が無血開城され、それに不服した榎本は、北へ脱走した。

「蝦夷共和国」樹立

その後蝦夷地に到着して、新政府軍を追い出し、箱館五稜郭（箱館開港後に徳川幕府が開設した箱館奉行所を守るための城郭）を占領した。しかし、軍艦「開陽」が、悪天候のため座礁し沈没してしまった。この結果、旧幕府軍の戦力が低下した。その後、旧幕府軍は士官以上の幹部による入札（選挙）で首脳人事を決め、「蝦夷共和国」が樹立。初代総裁には榎本武揚が、陸軍奉行並には土方三蔵が選出された。

主力の開陽を失った旧幕府軍に対して、最新鋭の装備を整えた装甲艦を手に入れた新政府軍の戦力が圧倒的に優位に立った。旧幕府軍は、後退を余儀なくされ、榎本ら旧幕府軍は五稜郭にこもった。翌日、新政府軍参謀・黒田清隆から降伏勧告書が榎本に届けられた。しかし榎本はこれを拒否。さらに榎本は、『海の国際法規と外交』のオランダ語訳本を取り出し、「この書は、今後の日本にとって役立つ貴重なものなので灰にするには惜しい。政府軍参謀に寄贈したい」という内容の書状を添えた。これに対し、黒田参謀は、返礼として酒5樽を五稜郭へ届けさせた。しかし旧幕府軍にとって、戦況はますます悪化。結局榎本ら旧幕府軍は、降伏し、戊辰戦争はようやく終結した。

牢獄

榎本ら旧幕府軍幹部は東京へ送られ、牢獄に収監された。榎本ら旧幕府軍幹部の処置については、厳罰を求める長州閥（木戸孝允ら）と黒田清隆ら薩摩閥との間で調整がつかず、2年半にわたって収監されたままだったが、黒田清隆や福沢諭吉らの助命活動によって、1872年榎本は出獄し、その2か月後ついに無罪放免となった。

第二の人生

北海道開拓にかける熱意とオランダ留学以来培ってきた科学者の資質から、アメリカと対等の立場で開拓事業に取り組む事ができると期待され、榎本は黒田の申し出を受けて、1872年開拓使四等出仕（県令待遇）の辞令を受けた。

榎本は、函館周辺から石狩、日高、十勝、釧路をまわって資源調査を行い、函館に日本初の気象観測所を設置した。

1874年にはロシア駐在公使となり、樺太・千島交換条約を結んだ。1882年8月には駐清特命全権公使となり北京に赴任。

1885年に内閣制度が始まると、榎本は第1次伊藤博文内閣の逓信大臣に就任、1888年黒田清隆内閣では逓信大臣と農商務大臣を兼任した。またこの年、電気学会の初代会長になった。さらに、暗殺された森有礼の後任として文部大臣に就任。1891年には、第1次松方正義内閣の外務大臣、1894年には、第2次伊藤内閣の農商務大臣に就任した。

晩年も榎本は、工業化学会の初代会長や、黒田清隆の葬儀委員長を務めている。しかし、1905年10月に海軍中将を退役すると、1908年7月から病にかかり、同年10月26日、73歳で腎臓病により亡くなった。

〈参考〉

https://www.kodomo.go.jp/yareki/person/person_06.html

http://kazahana.holy.jp/hakodate/enomotoTakeaki.html